

質疑応答

質問は、東京都千代田区大手町 1-3-4、気象庁内
日本気象学会天気編集委員会宛、どうぞ

問：梅雨入り、梅雨明けはどうして決めるのですか

(一会員)

答：梅雨はひとつの季節で、年によってある日を境にして明確に梅雨に入り、また明けるが、一般には晴雨の日が入りまじって何となく入り、明けるものであるから梅雨の定義と決め方には昔から多くの議論がある。

しかし、「入り、明け」を積極的であれ消極的であれ発表している以上は、決め方の技術的基準が明らかになっているはずであるが、人による定義の違いや現象の複雑さなどからかなりあいまいである。気象庁予報部の通達(1963)の中に一応次のように述べられている。

「梅雨は5月中旬から7月下旬までの現象で、各地方別に天気経過(たとえば、半旬日照時間の経過)を主な目安として決める。天気経過だけで決め難いときには、気圧配置も考慮する。入り、明けが決め難い時は強いて決めずはっきりした入り、明けはないとする」

以下、私見ではあるが、決め方の現状についてまとめておこう。

1. 気象要素による決め方

(1) 季節感(暦の入梅の日など)を考慮して、各地方の入り、明けの平年値と余り大きく違わない範囲で決める。各地の既往の入り、明けの期日(予報部季節予報資料にある)に5月初めあるいは8月中・下旬の値がときに見られるが、このようなときは不明またはわからないとすべきであろう。

(2) 典型的な入りは、この期日を境にして曇雨天が続き、明けはこの期日を境にして夏の晴天に入るので天気の変化から容易に決められるが、多くの場合は入りのあと晴天が続いたり、明けのあと冷涼な雨天が現われ梅雨もどったりする。このようなときの決め方がむづかしく、現状ではかなりの主観や任意性が入っている。

(3) 日照時間の半旬移動平均値や雨の降り方の変化などを定性的に見て判断する。雲量の変化を客観的にみる方法がある(東京管区気象台、1960:地域気象ハンドブック)。すなわち、日平均雲量の5日移動平均値が引き続いて3日以上7.5を越している最初及び最後の期間の初・終日を入りと明けにとる。但し、移動平均雲量が7.5以下でも、初日の前または終日の後に引き続いて降雨のある場合は、その降雨の初、終日を入り、明けとする。

なお、梅雨期間というのは初日から明けの前日までの

期間をいっている。

2. 総観パターンによる決め方

(1) 梅雨入り

ア. 地上気圧配置が梅雨型となること。オホーツク海高気圧、小笠原高気圧、梅雨前線の存在だが、オホーツク海高気圧が現われないときもある。

イ. 上層では、オホーツク海から西シベリアにかけてのブロッキング高気圧の発達と西進。中国東北区から黄海にかけての定常的な谷の存在。

ウ. 亜熱帯ジェット気流(300 mb)がテンジャン山脈から華中を通り、本州付近を南西風として吹走し安定する。寒帯ジェット気流はバイカル湖付近で大きく蛇行しブロッキング高気圧の形成に寄与する。極東ではジェット気流が分流して逆位相パターンが顕著となる。

エ. チベット高気圧が形成され、中心が $26\sim 30^{\circ}\text{N}$ まで北上する。日本南方の亜熱帯高気圧の軸が $25\sim 30^{\circ}\text{N}$ まで北上し小笠原から台湾方面につらなる。

オ. チベット高原の南を通る偏西風が消失し、南西季節風がインド上空へ広がり、更に東方へ拡大する。

カ. その他、成層圏の風向・風速の変化など。

(2) 梅雨明け

ア. 地上では梅雨前線が北方に移り、本州付近は太平洋高気圧におおわれる。

イ. 上層では亜熱帯高気圧の軸が 30°N を越えて北上し、日本上空に達する。しかし、中緯度高気圧の循環が日本付近で広がり強まることもある。このときは梅雨前線が南下して本州南岸で弱まり消失する。

ウ. 日本付近の500 mbの高度が上昇する。500 mbの高度が秋田で5,800 m以上、5,880 mが日本のどこかに現われる。

エ. 亜熱帯ジェット気流(300 mb)がテンジャン山脈からチベットの北側、モンゴル及び樺太方面に位置する。

オ. その他、成層圏の風向・風速の変化(たとえば、マークス島上空18 km(70 mb)の風向が5月初め西よりから東に変わり6月中に東風が強まり5日以上連続的に10 m/s以上になると平均31日のずれで西日本の梅雨は明ける)など。

以上、梅雨入り、明けは1, 2を相互に考慮して決められるのである。なお、入り、明けの予報などについては、気象庁予報部の予報課技術資料(週間予報資料)や季節予報指針下巻などを参照願いたい。(宮沢清治)